

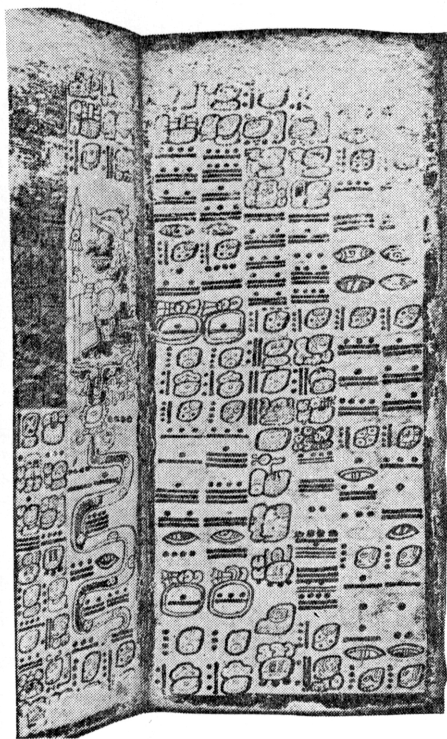
みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

三章
数字
字



ドレスデン絵文書にみられる数字

丸と棒で表わす方法

数を表わす文字をもたないテキストというのはほとんどない。二六〇日曆にも三六五日曆にも、四章でみる長期曆にも、数字がでてくる。数字は、これらの曆に用いられるばかりでなく、ある日とある日のあいだの日数の計算や月齢や金星曆の計算、さらにはマヤの神々の名の一部にまで用いられている。また数自体が神聖なる神として崇められていた。数はこのように、マヤ文字資料中、重要な役割を担っている。

数字を表わすのには四つの方法がある。

もっとも多く用いられ、しかももっとも簡単な表記法は、点または丸と棒による表わし方である。丸は1、棒は5を表わす。たとえば8は、一本の棒と丸が三つで表わされる。12は二本の棒と二つの丸で表わされる。

マヤの数字体系は二十進法である。だから20以上だと、位置が重要となる。たとえば、17は17の上に8がおかれる。ある位が0の場合もあるわけで、その場合、貝を様式化した文字が使われる。820は、0と5と2を表わす、貝と棒と丸二つが、下から上へ順におかれて表わされる。すなわち下から上へ位が高くなっていく。

点と棒による表記を私たちが転記する場合、高い位から低い位へ、アラビア数字と黒マルを使

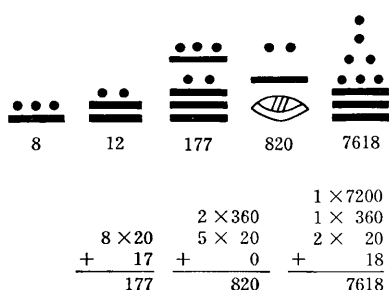


図23 数字の表わし方

って書くことにする。たとえば177は8・17で、820は2・5・0と書く。位置によって位を表わす表記法は絵文書で用いられている。碑文では、それぞれの位は決まった文字で表わされる。これらは「期間の文字」というが、それは長期暦を扱うときにみることにしよう。

ここでお気づきになったかもしれないが、第二桁目は二十進法に従わず、18までしか数えられない。つまり、十八月(ウイナル)で一年(トゥン)になる。それゆえ三桁目の単位は三六〇である。一桁目が一の位、二桁目が二〇の位で、三桁目は三六〇の位となる。以下は二十進法に従い、四桁目は七二〇〇の位(三六〇×二〇)、五桁目は一四四〇〇〇の位(七二〇〇×二〇)となる。

私たちが実際にみることができるのは、暦に関する例しかない。しかし、暦以外の数を数えるときには完全な二十進法が用いられていたようである。そのことはランダの記述からわかる。『ユカタン事物記』には、カカオ豆を数えるのに完全な二十進法が使われていたことが記されている。また、高地マヤのカクチケル族のように、暦でさえ一年を四〇〇〇日にして、二十進法を守っていた部族もある。

点と棒による数表記は簡単であるが、碑文では装飾要素がつくため、碑文が消えてはっきり読めないとき、正しく読み下せない場合が生じてくる。たとえば5を表わす棒の内部に装飾のための線がはいっていると、本来5を表わすはずの一本棒が二本あって10を表わしているように見える。また、6や7の場合だと、1を表わす丸の占めたあと之余白がたくさんできるので、それを埋めるために、三ヶ月形などの装飾要素が用いられる。テキストが不明な場合、それらの装飾要素が1を表わす丸と区別がつかなくなって、6や7が結果として8にみえることになる。ふつう丸が一つだと両端に二つの三ヶ月形の装飾物が、丸が二つだとまん中に三ヶ月形の飾りがつき、結果として3を表わしているようにみえる。だが、二つの丸に二つの三ヶ月形要素がつくこともあるし、四つも丸があるのにさらに装飾要素として三ヶ月形の要素がつくこともある。

初期のテキストにはこのような装飾物はないが、後期にはいると、これはごくありふれたものとなる。さらに時代が進むと、装飾要素は三ヶ月形から×印に変わっていく。また、全般に装飾物は少なくなる。

このように、テキストがはっきりしていないと数字をまちがって読むことがおこる。しかし、マヤのテキストには、ふつう、日付がいくつもできて、その日付がたがいに関連し合っているので、少しくらい不明のところがあっても、計算から正しい数、正しい日を導くことができる。また、テキストそのものの書きまちがあるもので、たんに読み下すばかりでなく、かならず、

日付の確認を計算からもする必要がある。

頭字体で表わす方法

二番目にみる表記法は、頭字体による数表記である。

図24に各数字の文字をあげたが、それぞれほかと区別がつく特徴をもっている。たとえば、2だと頭上に握りこぶしをもっているし、5だとトゥンの文字をもっている。4や6は目に特徴があり、9はあごにひげがあるか額にヤシユの文字素をもっている。10はあごが骨に置き換わっており、額の前に「死の目」をもっていたり、ほほに%印をもっていたり、死の象徴がある。13以降はあごが骨に換わっただけで、あとは3から9までの頭字体とおなじである。ただし13だけは長くたれさがった鼻をもった別の頭字体がある。完了または0は、あごが手に換わった頭字体によって表わされる。

13から19までの文字は、3から9までの文字のあごが骨に換わっただけで表わされるのがふつうである。しかし、13の文字の二番目にあげた例のように、3を表わす頭字体と10を表わす頭字体を並べて13を表わしたり、19の文字の二番目にあげた例のように、9を点と棒で表わし、10を頭字体で表わして、二つ並べて19を表わす例など、少し変わった例をみかけることもある。こういった少しばかり変わった例をみると、マヤ人の書記(彫刻)者のなかにも、型にはまった文字

を刻むのがいやで、ちょっと変えて表わしてやろうとした人がいたのではないかと思えてきて、楽しくなる。

同定がむずかしいのは、1と8であろう、どちらも女神の横顔で、よく似ている。しかし、区別がつきにくい場合や、消えていて示差特徴がよくみえない場合でも、計算からどの数字を表わしているのか導けるので、それほど問題はない。

13以上は10の特徴のあご骨がついているが、11と12にはついていない。これはマヤ諸語の数体系をみれば納得がいく。

ユカテコ語では10をラフン、11をブルック、12をラファ、13をオシユラフンという。13以上は3（オシユ）に10（ラフン）、4（カン）に10（ラフン）という形成法をとる。つまり10を表わすラフンがついてできる。しかし、11と12はブルック、ラファといい、1+10、2+10という形をとらない独得のいい方をする。文字はどうかというと、これも、10を表わすあご骨が13以上の数にはついているのに対し、11と12はそのようなあご骨がついていない独得な形をしている。つまり文字はマヤの言語を反映している。それも低地マヤ諸語の言語を反映している。というのは、高地マヤでは、11は、たとえばケクチ語で、フンラフー、12はカブラフーといい、1+10、2+10の形成法をとり、低地マヤ諸語のいい方と異なる。文字のつくり方と一致しないので、マヤ文字のことばは高地マヤ諸語ではない、ということができる。

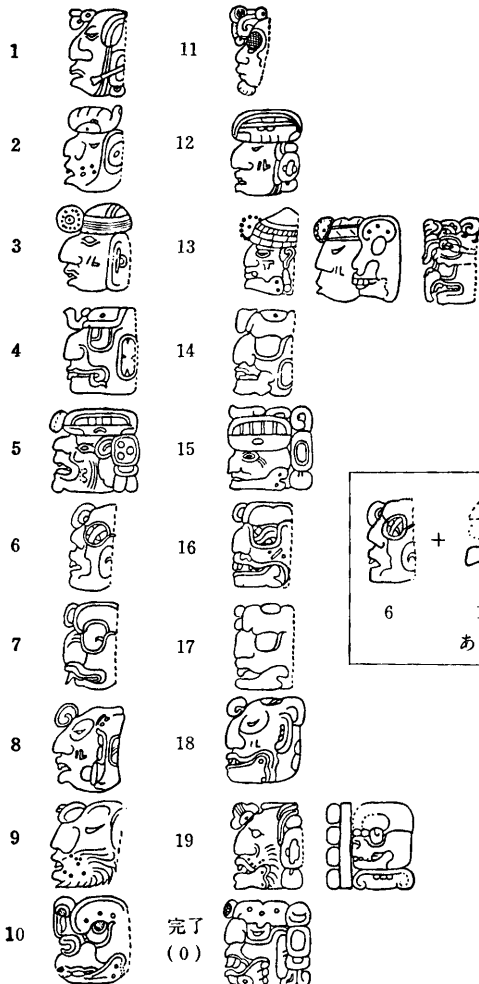


図24 頭字体で表わされた数字

幾何体で表わす方法

三番目にみるのは、少ししか例がないが、幾何体によって表わされた数字である。

指は1を表わす。また、ドレスデン絵文書の九ページに、3を表わす文字として、図25の二番目の文字が使われている。図24で示した3や13の頭字体と比べると、絵文書の場合は頭がアハウに換わっているが、頭字体の変形した文字とみなすことができる。

4は太陽神を表わし、8はトウモロコシの神を表わすといわれている。そのことは、頭字体の表わす横顔がそれらの神を描いていることからわかるが、幾何体でも、太陽とトウモロコシで4と8を表わす例があることから納得できる。コパンの石碑1では、太陽の印(キン)で4を表わし、8はトウモロコシを表わす印で飾ってある。

完了または0は、絵文書では貝を様式化した文字で表わされる。碑文では、図25の上から六番目の例からわかるように、二種類ある。右のほうの例は、頭字体のあごが手でおおわれていたように、手が描かれている。

ところでこれらの文字は完了または0を表わすといってきたが、いまだに完了を表わすのか0を表わすのか決着がついていない。しかし、手(EM)には「完了」の意味があるので、これらの文字は「完了」の意味で使われているにちがいない。というのも、パレンケの「十字の神殿」の

パネルのB13には、図26のような文字で20が表わされているからだ。左半分の文字素は、図25の六番目の文字素である。右半分は20を表わす文字素である。もし左が0であれば、0になってしまふ。完了であるとするとも20が完了したということ、20を表わすことになる。だから、完了を表わすと考えたほうがよいのである。

20は月を表わす文字で表わされる。もっとも興味深い例は、ドレスデン絵文書の一九ページの上段の11を表わす文字である。残念ながら一部消えていてはつきりわからない。しかし、右上と下の文字素はランダのアルファベットの「I」と「C」である。ユカテコ語で11はブルックといふので、もし消えている左上の文字素が「C」を表わす文字素だとすると、全体で「bu-Iu-ku」と読まれ、ユカテコ語の11の表わし方と一致する。

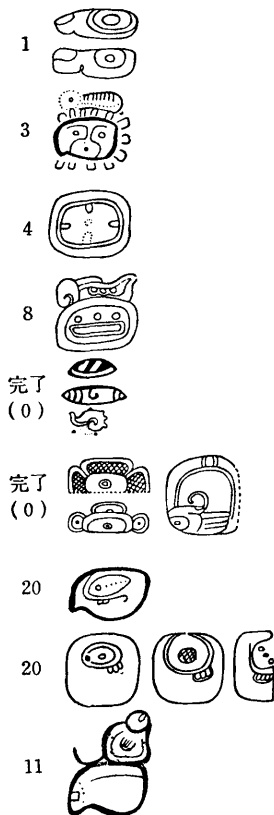


図25 幾何体で表わされた数字



図26 「十字の神殿」の20

先に、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれているといった。現在、低地マヤ諸語は三つのグループに分けることができる。絵文書の文字は、そのなかでもユカテコ・グループの言語で書かれたとすることができる。というのは、残り二つのグループである Chol・グループとツェルトル・グループでは、 π の口蓋化がおこり、 η をブルツチというからである。もしこれらのグループの言語を反映したものであったら、 π の文字ではなく、 ch (η) の音価をもつ文字が使われたであろう。もちろん文字の正書法が定まって以後——ドレスデン絵文書が書かれたのは一三〇〇—一三五〇年頃といわれているので、それ以後—— π から ch への口蓋化がおこったのなら、いまの推定はまちがいということになるが、そのほかの証拠からもユカテコ語に一番近いといえるので、その推定は正しいとみることができる。

では、低地マヤ諸語の言語を反映しているという碑文時代の言語のほうは、どのグループが一番近いのであろうか。これに対する答はまだ明確にだせないが、やはりユカテコ語に近いと思われる。しかし碑文時代にも現在とおなじような方言的な差があつた可能性はある。パレンケやコパンの周辺では、いまでも Chol 語や Chol ティ語が話されている。この二つの地点が、地理的にかなり離れているにもかかわらず、ことばがよく似ているのは、以前パレンケからコパンにかけて同一のことばが話されていたからである。これらの場所の碑文は、ペテン地方の碑文と少しばかり趣きを異にしている。この違いは方言の差にもとづくと考えられてもおかしくない。少し

三章 数字



9 バクトウン



15 カトウン



10 トウン



0 ウィナル



16 キン

図27 全身像で表わされた数字

最後に、マヤ文字の傑作ともいえる全身像で表わされている数字をみてみよう。これらは一見ただけではなにを表わしているのかわからない。しかしよくみると、頭字体のところであげた示差特徴をその頭のところにもっていて、いかなる数を表わしているのかわかる仕組になっている。たとえば、図27の一番上の例は、あごのところの点ががあるので、9だとわかる。二番目は頭がトウンの文字で、あご骨が描かれているので15である。三番目はあごが骨に換わっているので10、四番目はあごが手に換わっているので0である。一番下の例は、目が×の字になっているので6であるが、その下に頭蓋骨のような頭であご骨をもっている10を表わす文字があるので、16

全身像で表わす方法

ずつそれを裏づける証拠があがってきているが、まだまだ結論をだすのは早すぎるので、このような方言的差があった可能性はおおいにある、というだけにとどめておこう。

である。

例にあげた全身像の数は、いずれも次章で述べる「期間の文字」と結合している。左側が数字、右側が「期間の文字」である。これらは全身像で描いた数字のなかでも、わかりやすい例ばかりである。ひじょうにわかりにくい例もあるが、マヤの暦表記は、いろいろな暦で時を定めようとした暦、いいかえれば、冗長度の高い表記法であるので、そのほかの情報から、まちがいをなく読み下せる。